

下山一の証言

林えいだい『霧社の反乱・民衆側の証言』（新評論、二〇〇二年）より

頭目の娘ピコタウン

日本の台湾支配に対して、最後まで抵抗していたセーダッカ（霧社蕃）が帰順したが、それはあくまで表面的なことで、実際には蕃害（反乱と出草〔首狩り〕）が絶えず、総督府の理蕃対策は成功しているとはいえなかった。台中州理蕃課では、南投庁（後の南投県）内で、連日のように会議がもたれていた。

ある幹部が、「日本人巡査と、蕃社の有力者の娘を結婚させ、まず血縁関係をつくって情報を探らせ、それをもとに蕃地行政をしたらいかがなものか？」と提案した。

それを聞いた出席者は、蕃社の娘との血縁関係をつくることに大反対した。第一、日本人巡査の中で、それを希望する候補者が誰もいないことを知っていたからであった。南投庁理蕃課長が、実験的に一人を選んでやってみてはどうかと提案して、政略結婚の第一号が決まったと父（下山

一一九一四年（大正三年）、日本統治下の台湾で、理蕃政策（先住民統治政策）の一環として、山地先住民の頭目の娘と結婚した日本人警察官・下山治平の長男として生まれる。十一歳の時に父・治平が日本人の妻子を連れて帰国したため、以後、母一人の手で育てられる。台中師範学校を卒業後、教員となるが、日本の敗戦により失職。一九五四年、台湾国籍を取得し、林光明と改名。退職後、キリスト教会の牧師となり、一九九四年、没。

治平」から聞いている。

この政略結婚は、私の父とマレツパ社の頭目の娘ピッコタウレであった。その成果があったということで、次にマシトバオン社の頭目の娘ヤワイタイモと、霧社事件当時の能高郡役所霧社分室主任の佐塚愛祐（さづかあいすけ）警部が選ばれた。さらに巡查部長下松仙次郎と、サラマオ蕃のリットクノーミンと続いた。そのほかマヘボ社の頭目モーナルーダオの妹テワシルーダオと、近藤儀三郎も政略結婚だった。

私は一九一四年（大正）七月一日生まれ、その前に姉の春子が生まれているから、遅くとも一九一一年（明四四）には父と母は結婚式を挙げていると思う。

父の下山治平は、一八八六年（明一九）十月十五日、静岡県三島市で生まれた。

一九〇七年（明四〇）、応召して台中連隊に入隊した。入営中に佐久間総督による五カ年計画理蕃事業のタロコ蕃討伐に参加したそうで、肩に蕃刀で切られた大きな傷跡が残っていた。

除隊すると総督府の巡查となり、最初にマシトバオン社、続いてマレツパ社の駐在所に勤務した。警部補になったのが、一九一九年（大八）だった。

当時、能高郡役所警察課の霧社分室管轄下の若い巡查の中で、父が蕃地の娘との結婚に最適といたので、政略結婚の候補として選ばれたのだった。父は軍隊経験者で胆力もあり、口八丁、手八丁というやり手だったようだ。

しかし、この結婚話を持ち上がった時、父は初め日本の故郷に許嫁がいるといって断った。ところが、「総督府としては、蕃地を治めるための政策的なものだから、国家のためと思って三年

間でいいから結婚してくれ。後はその女を捨てても構わないから頼む」と警察課長から説得された。

私の母のピッコタウレには、壮丁（蕃地の若者・壮年男性）のウマオタウレという恋人がいた。当時はいかに恋をしていても、結婚は親が決定する権限を持っていた。マレッパ社の頭目のタウレヤユツは、警察から相談を受けて不本意ながら承諾した。

白狗駐在所には、日本側が持参した米酒、牛、豚、塩鱈その他の食料、布地、什器類が与えられ、酒を飲み、歌え踊れの結婚披露宴が数日間続いた。

マレッパの駐在所に最初に勤務した巡査は壮丁の襲撃で殺されて不在だったので、父はその後任としてカナジー社（当時、マレッパ社中最大の蕃社）に勤務し、しばらくしてマレッパ駐在所の主任となった。

父は結婚後まもなく、管轄下のカナジー社で、壮丁の銃器隠匿及び反抗計画があることを知り、調査のために壮丁を勢力者（頭目に次ぐ蕃社の権力者）の家に集めた。問題がない善良な者はすぐ釈放した。前もって母が調査していた札つきの反抗者は、駐在所の留置場に入れるため縄で縛って待たせた。

一人の壮丁は、日頃から日本人に反感を持っていたので、処罰されるに違いないと思ったのか、小刀を取り出して動脈を切り、その場で自殺してしまった。

それを知った青年の父親が、下山治平が息子を殺したと誤解して怒り、持ってきた蕃刀を抜き、父を刺した。避けようとしたが横腹に刺さり、腸が傷ついて大出血した。

父が倒れたのを見た警備の巡査が発砲したため、数人の負傷者が出た。父は担架に乗せられ、一日半かかって南投県埔里の病院に運ばれ手術を受けた。命だけは取り止めたが、母は父と壮丁との間で板挟みになって気苦労が絶えなかっただろうと思う。

母は日本語は書けなかったが、駐在所の奥さんたちが言葉を教えてくれたので、日常会話では別に困ることはなかった。裁縫もできて、和服を一人で縫えるほど上達していた。父の所に来客があるので、日本料理も上手に作ることもできた。

その後、二人の間には春子、私、弟の宏、妹の敏子、静子が生まれた。

父は日本内地の祖父や親戚の者から、台湾の蕃社の妻と早く別れて、日本に帰って婚約者と結婚するようにといわれ、ずいぶん悩んでいたようだ。だが結局父は、その婚約者と内地で結婚式を挙げるために、マレツパを後にした。

マホニー殺害事件

父が内地に行っている間に、蕃社で大事件が起こった。

タイヤル族の社会には、昔から一般的な常識では計り知れない、たくさんの迷信や習慣があるが、その一つにマホニーというのがある。

妖術というか、呪詛に当たるものであるが、マレツパ社ではこの術とそれを行う者をマホニーと呼んでいる。これを行う者は、特殊な小鳥のような動物（この鳥はあまり大きくなく、片足、片羽根、片眼で、これを見た者は死ぬといわれている）を飼っていた。

普段は人目につかない場所で飼っているが、マホニーはこの鳥から術を授かり、自分の恨んでいる人、妬んでいる人、殺そうとする人に術をかけると、かけられた人は病気になるって苦しみ、血を吐いて死ぬといわれた。

このマホニーの家柄の人は、壮丁からは大変恐れられ、嫌がられる存在だった。マホニーが口の中に小さな粟粒を含み、唾と一緒に相手に吹きかけ、呪文を唱えると、どんな人でも病気にして殺すことができるという。

例えば、「あなたの豚は大変立派だ」とマホニーがほめて、しかし心の内でそれを妬んだとする、翌日はその豚は必ず病気になるって死ぬので、「これはきつとマホニーされたのだ」とわかるというのである。

また、「あなたの子どもは大変美しいですね」とマホニーにいわれると、その子は死ぬか、または盲目になってしまう。あるいは山に猟に行つて、いかに獲物が暴れても、マホニーの手にかかると必ず倒されてしまうという迷信が伝わっている。

また蕃社内では何か変わった病気でもすると、これはきつとマホニーの仕業だということで、マホニーは壮丁から嫌われ恐れられた。マホニーの家はごく少数で、壮丁の反感を買って殺されることもある。

当時、カナジ―社の上方に、このマホニーと呼ばれる人々が五戸、三十数人が固まって住んでいた。マホニーの人々は、われわれはいつの日か全滅させられるかも知れないと、常に警戒して暮らしていた。どうせ殺されるならば、こちらから先に駐在所を襲つてしまおうということにな

ったようだ。下山治平はいま不在なので、まず下山の家を襲って家族を殺そうと、ある日の明け方、私の家族が住む駐在所の官舎に集団でやってきた。

戸袋を蕃刀で激しく壊す音がして、母が目を覚まし、私と弟と妹を抱き寄せ両手でおおった。れた。

「外の声を聞くと、どうも上の部落のマホニーのようだ。私たちの首を切りにきているようだ。お前は早く裏から出て巡査に知らせてこい、早く行くんだ！」と母が私にいった。母は急き立てるが、私は恐怖のために体が震えて腰が立たなかった。

やっと這い出すと、隣の官舎に飛び込んだ。

「おじさん、上の部落のマホニーが、僕たちを殺しにきているよ。早く助けてよ！」

私は扉を叩いて大声で叫んだ。

二人の巡査が銃を持って駆けつけると、その足音に気がついたのか、マホニーたちは逃げた。後で母が私に話したのだが、全くその日は運がよかった。もし寝室のすぐ近くの勝手口から入ってきていたら、勝手口は鍵をかけていなかったもので、わが家は皆殺しにされただろう。彼らは一番堅い戸袋を切ったので、その音で母が目覚めたため助かったのである。

母はマホニーの姿が見えなくなると、近くに住む勢力者だった弟のヤブタウレ（後に頭目となる）に、マホニーが駐在所を襲ったことを話した。

ヤブタウレは、マホニーを殺すため仲間に応援を頼みに行った。集まったピリンピータイ（ヤブタウレの妻ユーグツピータイの兄）、ヤッカウワタン、タックンナボほか二人の計五人はみんな

親戚だった。蕃社の中でも力のある壮丁を呼んで準備し、その朝、太陽の出る頃にマホニーを襲うために出発した。駐在所では二人の巡査が銃と日本刀を持って私たち家族を守った。

マホニーは全員、遠い畑に逃げるつもりで広場に集まっていた。ヤブタウレが指揮する壮丁が彼らを取り囲み、三十数人の首を蕃刀ではねた。

戦う声が駐在所まで聞こえてきて、私たち親子は震えていた。マホニー部落の人はみんな死んだが、ただ一人の例外は、私たちの親戚でマホニー部落に養子に行っていたコーガンヤユツだった。彼は危険を知って逃げてきて助かった。マホニーに関しては、文明の進んだ今日でも、山地の人々、特に老人たちのなかにはいまだに信じている者もあるくらいだ。

この事件には、また一つの事件が連鎖して発生した。マホニー殺害事件後、父は日本人の妻（伸子）を連れて帰ってきた。その妻を直接マレツパには連れてこずに、埔里の借家に住まわせて、父は自分だけマレツパ駐在所に帰ってきて、事件の報告を受けた。

タイヤル族の習慣として、マホニーを殺した場合、彼らが所有していた土地その他の財産は、殺した者の権利として奪うことができる。そのためマホニーを殺したヤブタウレは、すべての畑を接収してマレツパ社第一の地主となった。応援にきたピリンピータイたち五人には、土地をやるわけにはいかないから、マホニーが所有していた倉庫の粟、トウモロコシ、豆などの食糧を与えることにした。

あきらかに殺人事件だったが、父はその処分をどうするか決めかねた。露社分室に報告して、それがさらに能高郡役所、台中州、総督府にも届くとなると、重大事件に発展しかねない。ヤブ

タウレたちが罪を問われないように、マホニーの駐在所襲撃を理由に処罰を行ったとする報告書を提出してことなきを得た。

私の勝手な推測かも知れないが、父は日本に行く前に、ヤブタウレと打ち合わせて、マホニーを殺せと命令していたのではないかと思う。それを知ったマホニーたちが、先手を打って私たちの家族を襲ったのではないか。奇々怪々の殺人事件だった。マホニーの家族を含めて三十数人が殺されたこの虐殺事件は、霧社分室の内部で処理されたためにうやむやになってしまった。

そうしたある日、壮丁の一人が駐在所に駆け込んできて、「シムニー、プリンピータイたち四人が、マホニーの倉庫を開けて粟などを奪っているよ」と報告にきた。壮丁は、下山のことをタイル語がなまって「シムニー」と呼んでいた。

当時、マレツパ、マシトバオン社などは山岳地帯の急斜面にあり、常に食糧が不足して貧しい蕃社だった。父は単身、その倉庫に出向いた。

プリンピータイたちは、ちようど粟などを奪って荷造りしている最中だった。父は気の短い暴れ者で、命知らずなところがあった。

「お前たちは誰の許可をもらって勝手なことをするのか！ 他社の者が食糧など盗んではならぬことはわかっているはずだぞ！」父は大声で怒鳴りつけた。

すると壮丁の一人が、「これはわれわれ蕃社の掟であって、戦いに勝った以上、マホニーの食糧を取る権利がある」と主張した。

父は怒ってその男を殴りつけ、持っていた木刀を奪った。だが一対四ではどうにもならず、最

後には押さえられ、蕃刀で首を切られるところだった。その時、母と私、ヤブタウレ頭目が駆けつけ、父の体の上に馬乗りになつてゐるピリンピータイに飛びついて蕃刀を奪い取つた。その夜、豚を一頭殺し、酒と料理を出してピリンピータイたちと仲直りした。

父はいつも壮丁に軍隊式に命令して、反抗する者があると徹底的に殴りつけた。殴ることによつて命令しているかのようなので、父の職務は殴ることなのかと私は思つたほどだ。母の親戚以外の者で、父に殴られない人はいなかつたそうである。それは悪いことをした時に限つて殴るのであつて、酒をふるまつたりいろいろな物を惜しげもなく与えて、とても可愛がる一面もあつた。

私は幼い頃から、巡査が壮丁を理由もなく殴るのを見て育つた。日本語を話せない彼らに、何を命令してもわかるはずがないのに、いうことを聞かないといつては殴るので、壮丁の反感を買つたのは当然たつた。

日本人巡査がタイヤル語を少しでも話せたとしたら、霧社事件のような悲劇は起こらなかつたであらう。私は父たちの姿を見て育つたので、成人しても絶対に巡査にはなるまいと思ひ、台中師範学校を卒業後、警官になれと分室長から話もあつたがついに断つた。

マレッパ社にホービンイロンという十二歳の子どもがいた。私の父は駐在所付近の畑に落花生を作つて、小屋の中に収穫物を保管していたが、ある日そこからホービンイロンが落花生を盗んだ。それを知らせる者があつたので、父はホービンイロンを捕えてきた。

駐在所の事務室に連れてきて、両手を縛り罰として木刀で叩き始めた。二、三十回で止めるのかと思ひきや、二百まで数えながら叩いた。その夜も縛りつけたままご飯も与えないので、母が

可哀想にと縄を解き、食事を与えて放してやったことを覚えている。

それまでのタイヤル族の世界では、頭目の権限で支配していたものが、日本統治時代になると警察権力がすべてを支配するようになった。

頭目の支配から父たち巡査が支配するようになり、それだけに反発が強く、不穏な空気が蕃社全体にみなぎってきた。

サラマオ事件

サラマオ蕃といえ、現在の台中県和平郷梨山のことである。台中から太平洋側の花蓮港に抜ける東西横貫公路の中間点の鞍部で、出岳地帯の斜面に果樹園が広がっている。

サラマオ事件とはいかなる事件であるか、簡単に説明することにしてしよう。

一九二〇年（大八、インフルエンザがこの地方に猛威を振るい、サラマオ蕃全体に多数の死者を出した。

これに起因して、当時の東勢郡サラマオ蕃は、新竹州キナジー蕃、および北勢蕃の動揺と共に蕃情が悪化、翌年の九月十八日、サラマオ蕃の壮丁は合流点分遣所と柵岡（くぬぎおか）駐在所を襲撃した。その結果、警部補・長久保栄左エ門以下、日本人十九人を殺傷してしまった。

事件発生を知った霧社分室では、総督府の命令でサラマオ蕃討伐を決定した。マレツパ社、白狗蕃をはじめ、セーダツカの各蕃は、官命に従って味方蕃としてサラマオ蕃討伐に参加した。そしてサラマオ蕃が帰順するまで、日本側の討伐隊員として戦うことになった。要するにタイヤル

族の同族同士を戦わせたのである。後の霧社事件の原形が、このサラマオ事件だった。

父の下山治平は、サラマオ蕃討伐隊長として指揮を取るようになった。

父は軍隊時代にタロコ蕃討伐の経験はあるが、サラマオ蕃の山岳地帯の地理がわからないので、私の母を道案内として同行させた。

討伐隊はサラマオ蕃の激しい抵抗に遭って苦戦したが、目的を達するとサラマオの壮丁の首を持って霧社へ引き揚げてきた。

ある日の夕方、家族で食卓を囲んでいると、急に駐在所の前が騒々しくなつて、父の大きな声が聞こえてきた。一旦霧社に凱旋した後に、再びマレッパ社へ帰ってきたのだった。サラマオ蕃の人の首を五個下げていて、それを並べて何か叫んでいた。私はその首を見ると急に恐ろしくなり、吐き気がして食事を止めてしまった。よく見ると顎の付け根から切り取り、麻縄で結んで下げられるようにしてあった。半開きの目はどろんとして、今思い出してもぞっとする光景だった。その中には女と子どもの首もあった。

マレッパ社のある古老は、昔からタイヤル族は、人の首を取ると脳味噌を小さく刻んで鍋で煮て、子どもや若い壮丁に食べさせ、将来首狩りができるよう胆力をつけるんだと教えてくれた。

首を蕃社に持って帰ると、その後の祭りが大変にぎやかだった。帰順後は警察によって首狩りは禁止されていたが、サラマオ蕃討伐に限って公然と認めたわけで、非常に矛盾していた。久方ぶりの首狩りに、マレッパ社は沸き上がってしまった。

マレッパ社とサラマオ蕃の間では、婚姻関係があったので親戚が多い。身内の首狩りをしただ

けに悲劇的だった。だが、個人の関係はどうあろうと、蕃社全体の決定には従わなければならない。たとえ親子兄弟であっても例外ではなかった。それをけしかけ実行させた日本側のほうが、むしろ野蛮だと思う。

たくさんの大瓶に粟酒を入れて大いに飲み、女たちはかわるがわるその首を持って、酔っ払った勢いで輪になって何日間も踊った。

首の口の中には餅や里芋、豆を煮て固めたものを詰めた。踊りが終わると、それをみんなで分けて食べるのである。全く「首狩り人種」といわれるはずである。

蕃社によって方法は違うが、マレッパ社ではその首を木の枝に下げた。鳥がきてつついたり、自然に腐るのを待った。完全に骸骨になると、その首を切った者が歯を全部抜いて帰り、麻糸に通して首飾りにして武勇を誇った。一方、セーダッカの蕃社では、高い首棚を作って、そこへ首を並べその前で踊った。

首狩りは犯罪という意識はなく、その後には伝統的な首祭りが行われ、壮丁の武勇が称えられるのだった。

離別

霧社には、山地人が入学する大きな四年制の公学校があった。各蕃社は霧社と離れた辺境の地にあつて子どもたちが通学できないので、それぞれ蕃童教育所が建設され、駐在所の巡査が教員を兼ねた。日本人の子弟は、霧社小学校の寄宿舎から通学した。

私は一九二一年（大一一〇）、満七歳の時、公学校に入るため、マレツパ社から約四十キロある道を壮丁二人に背負われ、父と一緒に霧社へ向かった。

霧社分室管内から集まった生徒は、一年生から六年生まで合わせて僅か二十数人だった。先生は校長の他に女の先生がいて、二人で六年生まで教える複式授業だった。

公学校は、埔里から霧社鞍部に登りついた場所にあった。ここが霧社事件という悲劇の舞台となった。

それから約一年後、私が小学校二年生、弟の宏が一年生の時のことだった。父が埔里の帰りだといって、霧社小学校の寄宿舎を訪ねてきた。

「おいー、お母さんがそこにいるから、宏と一緒にきてくれ」

といわれたので、放課後、宏と二人で父が指定した芥川（分室巡査）の家に行った。ところがその家には母の姿はなかった。父が一人の若い日本人のおばさん（勝又伸子）を指さした。

「赤ん坊を抱いているのが、お前たちの新しいお母さんだから、今日からはお母さんと呼びなさい」。父からいわれたが、どうしても言葉が出なかった。

「この人は僕のお母さんじゃない……」

私は父に怒られるのを覚悟していった。

「じゃ、何と呼んだらいいのか？」と父がたずねた。

私は宏の顔を見つめた。

「おばさんだよ、おばさん」と、私はおばさんということを強調した。

それから伸子おばさんが亡くなるまで、私と宏は彼女のことをおばさんと呼んだ。

伸子おばさんと私たち兄弟は、霧社の公医診療所の下にある巡查官舎に住むことになった。父はマレツパ駐在所で母と生活しながら、時々霧社に降りてきた。伸子おばさんと長男の佐治男、私たち兄弟との奇妙な同居生活が始まった。暇をもてあました伸子おばさんは、いつも家を留守にした。昼食を食べに帰っても食卓には何もなく、戸棚から砂糖を取り出して宏と二人で食べた。二人とも砂糖を食べ過ぎたせいか、今でも胃が悪くて苦しんでいる。

そのうち伸子おばさんは希望が叶って、佐治男と生まれたばかりの治とともに、マレツパ駐在所の父のいる官舎に引っ越した。官舎では父と伸子おばさんと息子たち、そして私たち家族が同居することになった。

母は父と結婚した時、正式には下山家に入籍していなかった。しかし、現実には二男二女の子どもを生んでいる。まさに二重結婚のような複雑な家庭ができてしまった。

母にとっては日本人巡査に嫁ぎ、変わった環境の中で苦勞して築き上げた家庭である。そこへ伸子おばさん親子が割り込んできたため、その心情は耐え難い苦痛の日々だったと思う。

ついに問題が起こり、父は辞職させられ、一年後に日本に帰ることになる。

伸子おばさんがマレツパ駐在所にきて母と同居を始めて数カ月後のこと、能高郡の秋永郡守の一行十人が、白狗とマレツパ監視区の視察にやってきた。このような視察の際には、監視区監督の警部補宅で接待する習わしになっていた。

管轄下の巡査も全員集めて、郡守を中心に大宴会となる。豚を殺して、マレツパ社の頭目はじ

め勢力者も参加して、酒を飲み歌った。

郡守はすでにマシトバオン社を視察した際に、私の母のピッコタウレと家族のことを聞いていたらしい。用便の帰りに、郡守は炊事場で働いていた母の姿を見かけた。

「奥さん。この家に日本から下山警部補の妻がきて、あなたの家族と同居しているようだが、蕃情に影響があるのではないかとわれわれは心配しています。あなたの氣持を私に率直に聞かせてくださいませんか？」郡守は母にいった。

「私は山地の女で何もわかりませんが、やはりあまりいい氣持はいたしません」母は涙声で答えた。

宴会場に戻ると、郡守は隣の席で酒を飲んでいた父の袖を引いた。

「下山君、ちよつと話があるが……」

といつて向き直った。

「話とは？ 一体何のことでしょうか」

「下山君、現在、この家には妻と妾が同居しているということだが……。山地の人にはこんな習慣が全くないのに、指導的立場にある監督者の君がこれでは、蕃社の者に対してしめしがつかないではないか。ピッコタウレさんも親戚の者の手前もあつて悩んでいると思う。これが理由で蕃情が悪くなつて、事件でも起きたら郡守の私の責任になる。日本から連れてきた女房を、しばらく埔里なり霧社に住まわせたほうがいいのではないか？」

と意見した。それを聞いた父はカツときたらしい。



母・ピッコタウレ（左端）と父・下山治平（中央）と下山一（父右隣）

「郡守、お言葉を返すようですが、この件については、私もずいぶんと心を痛めました。経済上の負担も大きいことだし、伸子をマレッパに連れてくるが問題はないかと、蕃社の親戚とか勢力者とは相談を重ねた上でのことです。」

事件なんか起こるわけがありません。職務上の命令なら郡守のいうことを聞くが、個人の私生活のことには干渉しないでください。今夜は無礼講だから、私も遠慮なく意見をいわせてもらいます」

酒の上とはいえ、個人の私生活に干渉するなどみんなの前でいわれると、郡守の立場がなくなる。双方が大声で激論を交わすうちに、父は立ち上がるといきなり郡守を殴りつけた。柔道三段だった郡守が怒り、父を卓上に叩きつけた。殴り合いになり、警察課長が父に抱きついて引き離れた。

部下から殴られた郡守の気持は収まらなかった。

「明日、俺が郡役所に帰ったら、お前をただちに免職処分にするからそのつもりでおれ。電話連絡があり次第マレツパ駐在所から出て行ってもらう！ いいな」

「俺を首にするなら首にしろ！ ピッコと結婚する時、三年したら捨てていいといったのは誰か！ 俺に責任を取らせるならそっちも取れ、俺はすべてを犠牲にして官命に従ったまです。俺も男一匹、食うくらいのこととはできないことはない、いつでも辞めてやる。」

ここに頭目も勢力者もきているから、俺のいうことをよく聞いておけ。三年したら捨ててもいいといったのは誰だ。一緒になって子どもができれば愛情も生まれる。捨て切れずに一緒に暮らすのがなぜ悪いんだ。そうさせたのは一体誰なんだ！」

売り言葉に買い言葉、激しいのしり合いとなり宴会場はしらけてしまった。頭目と勢力者は、どっちの味方をするわけにもいかず、いつの間にか姿が見えなくなった。

翌朝、郡守は郡役所に帰ると手続きをすませ、マレツパ駐在所の父に電話で免職のことを伝えた。

私と宏はこの頃霧社小学校の寄宿舎に戻っていたが、ある日の夕方、父の使いがきた。

「一家がマレツパから霧社に移住してきている。家は郵便局の裏にあるから、二人は会いに行くように」ということだった。私と宏はさっそく家族に会いに行った。

その家まで行くと、母と妹の敏子、静子の三人と、荷物を運んでくれたマレツパ社の親戚の人たちが大勢いた。母は二人の妹を抱いて泣いていた。何かあったのかわからないが、子ども心に

異様な雰囲氣を感じた。

母の話によると、その日父は駐在所を辞めて、伸子おばさんと佐治男、治を連れて、埔里に下って行ったとのことだった。

翌朝、父は埔里からやってくると、時の分室主任の高井九平警部に、家族が住む家を探してくれるよう頼んだ。ちょうど霧社警察クラブの建物が空いていたので、高井警部がそこに住めるようにしてくれた。

母がショックを受けたのは、父と秋永郡守の口論の際、この結婚が三年したら別れてもいいとの約束だったということがわかったためで、頭目の娘としては耐え難い侮辱だったに違いない。

父は埔里で事業を始めたらしいが、時々霧社へやってくると泊まって行った。夜遅くまで両親が激しくいい争っている声を聞いた。それまで父に対して従順だった母が、伸子おばさんとの結婚のことをなじっていることがわかった。翌朝、父は私たち親子に日本へ行って一緒に生活しようとうと誘ったが、母は四人の子どもと台湾に残るといって承知しなかった。父もあきらめたのか、日本行きを口にしなくなった。

その父が日本へ帰る数ヶ月前、埔里から木綿の布団を四枚持ってきた。私の家には、母と結婚した時に父が与えた立派な絹布団が四枚あった。それが欲しいから、木綿の布団と交換してくれと母にいった。それを聞いた母の顔は曇った。押入れから布団を取り出すと、庭から棒を三本持ってきた。その一本を私に渡すと、母はその絹布団を破れるほど何百回となく叩いて、表の布を破ってしまった。気でも狂ったかのように叩き続ける母の姿を見て、父に対する憎しみが一挙に

爆発したのではないかと思ったほどだ。父はただ茫然と見ていたが、母の怒る気持が私には痛いほどわかった。

私たち子どもにとつても父から捨てられたことになるわけで、その口惜しい思いは同じだった。そしてついに父は日本へ去り、私たち兄弟は母の手一つで育てられた。

父が去ってからの母の落胆ぶりは大変なもので、一日中泣いてばかりいた。夫はもう帰ってこない、遠い日本へ行ってしまったとわかつてはいても、いつかひょっこり帰ってきはしないかと、そのことばかり考えて暮らしていた。父は帰国に当たって、私たち家族の生活を考えてはいたように、総督府と交渉した文書類をずいぶん残していた。マレツパ社の頭目の娘と政略結婚をさせられた理由を述べ、残した家族の生活は総督府で保障するべきだと、父なりに誠意ある交渉を続けていたことが後にわかった。それはせめてもの親心だったと思う。

母が理蕃政策のために結婚したことには功績があったので、父は総督府に要求して、私が成人するまで母が理蕃課の嘱託として、一カ月四十円を給料として受け取れるようにしてくれていた。それを総督府に認めさせたことで、私たち親子の生活は保証されたといえる。

頭目モーナル・ダオ

父が日本へ帰った後、母が嘱託で給料をもらうようになったので家族は飢えなかったが、一家の柱がなくなってしまった。子どもながら父の代わりとして、私の責任は重くなった。父がいなというので佐塚警部補（後に警部）が私の家族の面倒を見てくれた。学校が夏休みになると、

決まつて毎年マレッパ駐在所の佐塚警部補の家に遊びに行つた。一カ月ばかり滞在することもあるた。

また、母の弟・マレッパ社のヤブタウレ頭目や、ユーガイタウレ、ワリスタウレ、リットクタウレ、ヤーウイコーガン、ヤウイシュエンなど母の兄弟姉妹には、わが子と同じように可愛がつてもらつた。これらの親戚が霧社に出てきた時は、母はたくさんご馳走をして、帰りにはお土産を持たせることを忘れなかつた。

マヘボ社の頭目モーナルーダオは、霧社にきた時はよく私の家に立ち寄つた。母が出す塩鱈を肴にして、米酒を飲んでご機嫌だつた。

一杯酒が入ると、タイヤル族の昔話を語り、十三歳の時に首狩りをしたことを自慢した。サラマオ蕃討伐に父の下山治平と一緒に参加して、襲撃されて額に傷を負つたことも話した。そしてタイヤル族同士を戦わせた日本側のやり方を非難して、それは大きな間違いであると怒つた時の眼は忘れられない。近藤儀三郎の女房になつた妹のテワシルーダオと一緒にきたこともある。近藤が花蓮港に転勤になると、テワシルーダオは彼から捨てられて失意のうちにマヘボ社に帰つてきた。まもなく壮丁と再婚したが、近藤の仕打ちをモーナルーダオは非常に怒つていた。母も下山治平から捨てられた同じ境遇だつたためか、泊まつて行くこともあつた。テワシルーダオはいつも和服を着ていて、日本語がとても達者だつた。

ある日、昼食のために学校から帰つてくると、母とテワシルーダオが二人で食事をしていた。「お帰りなさい、一君」と彼女は私に挨拶した。

きれいな標準語で驚いてしまった。蕃地の女性には、ほとんどが蕃童教育所で日本人巡査に日本語を教わっているのだった。台湾の巡査は九州・沖縄出身者が多いため、言葉が非常に乱暴で命令口調だった。女性も巡査の言葉そのままに、「俺」、「お前」などという言葉を使った。

母とテワシルーダオは日本語で話していた。マヘボ社とマレツパ社は同じタイヤル族であるが、テワシルーダオの所はそこでもセーダッカなので言葉が違うのだ。むしろ日本語のほうが、二人にとっては共通語で話しやすかったのかも知れない。

またシカヤウ社の頭目ピリンピータイや、サラマオ蕃の母の友人イッパイナムたちも時々遊びにやってきた。公学校で開かれる運動会には、前日に蕃地から出てきて、珍しいものを土産に持ってきてくれた。栗と塩で漬けた魚のテンコーガンは、蕃地第一のご馳走で、少し匂いはするが食べ慣れるとこんなおいしいものはなかった。

花岡一郎・二郎のこと

一九二七年（昭二）三月、私は霧社小学校を卒業すると、埔里尋常高等小学校に入学した。寄宿舎には警察関係の子弟が二十数人いたが、一年先輩のダッキスナウイ（花岡二郎）はとても成績がよくて、寄宿舎ではよく本を読んでいた。スポーツマンで、陸上の選手だった私たちは、運動場で一緒に短距離の練習をした。夏休みになると私は霧社に帰り、ホーゴー社に二郎を訪ね、桜温泉の濁水溪で魚を獲って遊んだ。彼はホーゴー社の勢力者の息子で、財力があるので内地の大学に進学したいといっていた。

「僕の一生は警察が決めている。卒業したら霧社に帰って警手になれといわれていて、残念だがそうせざるをえない。君は内地に父親がいることだし、留学して自分の将来の道を選ぶからいいなあ」

二郎はそういつて深い溜息をついた。警手になれば五、六年すると巡査への昇進の道が開けている。これまで蕃地出身者で巡査になった者はなく、はじめてのケースとして彼を公費で高等小学校に入学させていた。しかし二郎は、理蕃課に一方的に将来を決められたことに不満だったようだ。だが逆らえず、私が卒業した時には、すでに霧社分室の警手となって、庶務係の電話交換手をしていた。

友人たちの大部分が台中師範などの上級学校を受験するのを見ると、私も進学したかったが、家庭の事情を考えて口に出すのを遠慮した。そのままいけば、必ず霧社分室の警手にさせられると思った。

「お前、頼むから父さんのように巡査にだけはなるなよ。威張るだけで、人間としては尊敬できない。最低だ」

ある日、霧社に私を呼びつけると、母が激しい口調でいった。これまで父のことを口に出していうことがなかった母が、はじめて父を批判した。母はその後、霧社分室主任の高井九平警部に相談に行った。

「お前のところの息子は、理蕃課としては分室の警手に採用して、将来は巡査として蕃地で働いてもらうことに決定している。親戚も多いことだし適任だ」

と高井警部はいった。それを聞いた母は顔色を変えて帰ってきた。

「日本の警察はどこまでも私たちを利用しようとしている」

母は怒って、布団を頭から被って泣いていた。

たまたま台中州理蕃課長が霧社管内の視察にきて、桜旅館に泊まっていることを知った母は、私を上級学校に進学させたい希望が強かったので、理蕃課長を訪ねて、台中師範へ進学させてもらえよう頼んだ。

先輩のダッキスノービン（花岡一郎）は、やはり台中師範を卒業していたが、学校の訓導にはさせてもらえず、乙種巡查に採用されて、マヘボ社の蕃童教育所の教員をしていた。それでもとにかく、私は台中師範に進学することになった。

世の中で不思議なものは、人間の縁である。

その頃私が懂れていた文枝という少女は、父親が分室の巡查で、家族は霧社の官舎に住んでいた。霧社小学校では私の一年下で、埔里尋常高等小学校一年生までは台湾に住んでいた。彼女は六年生の頃はすらっとした美人で、成績はいつもトップだった。私もこんな娘と結婚できたらと、夢にまで見るほどだった。私の母は蕃地出身だし、その頃は差別もひどかったから、日本人との結婚はあきらめていた。

台中師範入学のため、埔里を朝六時半に出発した時のことだった。台車（トロッコ）が魚池に着く頃、前方の台車に文枝と、知り合いの上島のおばさんたちが乗っているのが見えた。二水駅

に降りたとき、どこに行くのかとたずねると、日本に帰って女子師範に進学するといった。それを聞いて、とても淋しかったことを覚えている。

それが一九三九年（昭十四）に、日本女性との結婚に破れた私との再婚を承諾し、現在、私の妻となっている文枝である。

台中師範時代の霧社事件

当時の師範学校では、自分の家がどんなに近くても、全員が寄宿舎に入れられ、軍隊の兵営生活と変わらないほど厳しく監督された。今まで着ていた霜降りの学生服が真っ白な制服になり、学校からは十日ごとに一円支給された。

何といっても師範学校時代、私にとって忘れられないのは霧社事件である。

台湾の霧社といっても、一般の学生にはあまり知られていなかった。

一九三〇年（昭五）十月二十七日の夕方、図書館に行くと、学生が集まって「霧社で大事件が起こって、日本人は皆殺しにされて全滅した」と大騒ぎしていた。

最初のうち私は、それが大事件だとは信じられなかった。当時の霧社は比較的安定していて、大事件が起こるとは考えられなかったからだ。それまでは時々出草（首狩り）事件が起こっていたが、日本人の皆殺し事件とは驚きだった。

二日後、どこから聞いてくるのか、学生の一人が、大事件は真実で、屏東飛行隊が出動したといった。

その頃はちょうど台中市内八周リレーの練習中で、学生は自由に外出できた。夕食後にマラソン足袋をはき、猛スピードで台湾新聞社の前まで走って行ってみた。社の前には、大勢の人が集まって号外を手にしていた。私も大急ぎでそれを読んで、はじめて大事件だと知って胸が騒いだ。

霧社には母と妹の静子が住んでいて、二人ともきつと運動会に参加しているはずだった。あるいは運悪く殺されてしまったのではないかと思い、その夜は一睡もできなかった。

翌日から欠かさずに新聞閲覧室に行き、死亡者名と生存者名の欄を探した。毎日見たが、一カ月経っても家族は生死不明である。その時はもう勉強どころではなく、今までのように学んだことが頭に入らないし、夜も安心して眠れなかった。

台中第二中学校に在学していた佐塚警部の長男の昌男は、父親が殺されたことがわかって、半分ぼーっとした様子で、いつも師範学校の寄宿舎にやってきては私の側で泣いていた。全く気の毒だった。いろいろ慰めたが、その後二年続けて落第し、ついに二中を退学処分になった。

新聞記事と写真を分析して、事件の大体の様子を知ることができた。母たちは霧社から脱出したのだろうか、名前が新聞に出ないところを見ると、助かっているかも知れないとも思った。事件後早くも一カ月が過ぎたが消息がわからないので、母と静子は死んだに違いない、山の中で殺されて死体が発見できないのだと考えていた時、マレッパ駐在所の浅野巡査部長からの一通のハガキを受け取った。それはサラマオ蕃がある東勢郡を経由して、台中の私の所に送られてきたものであった。それには次のように書かれていた。

「このたびの事件では、霧社在住の日本人が大変な被害を受けました。あなたは家族が死んでし

まったと悲観していると思うが、現在、二人とも元気でマレツパ社に帰ってきている。ただ母の妹リットクタウレが、当日和服を着ていたため日本人と間違えられた様で、お尻を深く刺されたが命には別条ないから安心する様に。かしこ」

母と妹が事件に巻き込まれながら、命が助かったことが不思議だった。私はそれを知って元氣を取り戻した。しかし、二学期の試験では五番も下がって、在学中最悪の成績となった。

一九三一年（昭六）の正月には、私は帰省しても霧社の官舎がないことはわかっていたが、どんな被害を受けているか見たくなかった。嘉義農林学校在学中の弟の宏と佐塚昌男の三人で、埔里から霧社分室主任の高井九平警部に電話をかけ、入山の許可をもらった。

途中、牙山派出所の前までくると、銃を待った警備の巡查に止められた。高井警部の許可をもらったと説明したが、入山許可証がないと通すわけにはいかないといわれた。三人とも霧社に家があり、連れの一人は亡くなった佐塚警部の長男だといったが認めなかった。巡查が分室に直通電話をかけると高井警部が出て説明してくれたので、やっと人止関から坂を登ることができた。

霧社に着くと高井警部に挨拶をすませ、家族が住んでいた官舎を訪ねた。家財道具は全部略奪されてしまっていた。押入れに蚊帳が残っていたが、どす黒い血が固まっていた。後で聞いてみると、蚊帳の血は前記のハガキにもあったように、母の妹のリットクタウレのものだった。当日和服を着て運動会に行ったため日本人と間違われ、パーラン社のタダオワリスに竹槍で尻を刺され、母が背負って官舎まで帰り、押入れの中に蚊帳を敷いて休ませた時についた血だという。

それから三人で霧社公学校に行つて見ようということになった。その頃はもう軍隊は引き揚げ

て、警察隊が警備に当たっていた。霧社の町はなんとなくさびれて、パーラン社の者が出歩いていただけである。警備の巡査が一人、銃を持って見張っているのが見えた。

公学校に着いて三人が教室を回っていると、人の気配がしたので廊下で立ち止まった。教室の中で急に赤ん坊の泣く声がした。すると赤い蕃布を着た女が前をつくろい、赤ん坊をあやしなから教室から出てきた。その後から、一人の巡査が立ち上がり、ズボンを上げてバンドをしめて出てくると、素知らぬ顔で藪のなかに姿を消した。

霧社事件の原因の一つに、こうした巡査と蕃社の婦人の男女関係があった。事件が終わってまだ二カ月しか経っていないのに、すでにこのような男女関係が再びできているとは驚きだった。日本人巡査は、霧社事件の反省もなく何も学んでいないことを知った。

事件後、佐塚愛祐警部の弟で東京毎日新聞の記者をしていた袈裟次郎が台湾にやってきた。台中高女を卒業する佐塚警部の次女の佐和子を東京の音楽学校に入学させ、将来はパリに留学させてやるというて、佐塚警部の金を受け取った。

私と昌男は、台中の旅館に泊っていた袈裟次郎に呼ばれ、お土産代わりに一人十円もらった。そして翌日、佐和子と袈裟次郎を台中駅まで見送った。能高郡警察課では、私と佐和子の結婚を決めていたようだが、これで二人の結婚話は立ち消えになった。

霧社事件で日本人が殺されたが、一番可哀想だったのは、佐塚警部夫人のヤワイタイモ（日本名・八重子）だった。事件で夫を失い、続いて長女の豊子の肋膜手術のために精神状態がおかしくなり、そのショックから脱けきらなかった。

戦後、日本にいる末っ子の晃男と豊子の招きで横浜に行き、一九七七年（昭五二）に病死した。せめて夫の墓と一緒に眠ることができた点だけは、私の母に比べると幸福であつたろう。

台中師範では、卒業の年に必ず一カ月ほど日本へ修学旅行に行くことになっていった。私は父に会えると思い、日本行きをすぐ楽しみにしていた。ところが出発間際になって、台中州理蕃課から校長に連絡があり、下山一は日本旅行を差し止めにしたいと欲しかった。理由も知らされず、私一人が学校に取り残された。父の工作であることがわかってはいたが、あえて追及しなかった。仕方がないので母のいるマレツパ社に帰って休むことにした。母はマレツパ社の官舎に住んでいて、駐在所の雑用をしていた。そのかたわら霧社事件でお尻を刺された妹のリットクタウレの介抱をしていた。

その頃、埔里にいたヤワイタイモの病状が少し落ちついたので、私の母と同様、郷里のマシトバオン駐在所に嘱託で任命された。私は彼女を連れてマシトバオン社に行くことになり、当時二歳の晃男を背におぶって、霧社で一泊し、翌日七時間歩いてマシトバオン社に到着した。

数日後、ヤワイタイモは官舎を与えられ勤務することになった。佐塚警部がいた頃は「主任さんの奥さん」といわれ、みんなから尊敬されていたが、その時はとても淋しそうだった。マシトバオン社は、兄弟や親戚に囲まれて安住の地ではあったが、霧社事件のことが頭から離れなかったようだ。急に黙ってしまうかと思うと、怒り出したり大声で笑うなど再び異常なふるまいが見られるようになった。ある時などは官舎に火をつけ、もし発見が遅れたら大変なことになるところだった。この時のマレツパ社の公医が井上伊之助さんで、この先生がヤワイタイモの病気を治

療した。

霧社事件の時、白狗蕃といわれたマレツパ社とマシトバオン社の壮丁が、味方蕃として日本側に協力した事実を、私は全く知らなかった。佐塚警部がセーダツカに殺されたことに憤激して、その仇討ちをするためにマシトバオン社も味方蕃に加わり、蜂起蕃を襲った。何人かの首を取って帰り、それを木に吊るしていた。首祭りがあると聞いて私は興味を持って見に行き、ヤワイタイモの一番末の弟ピハオタイモの家に泊めてもらったことがある。一晚中庭に焚火して栗酒を飲み、気が狂ったように歌いながら踊った。人の首を取って祝う「首祭り」がこんなに盛大だとは、文明社会では考えられないことだった。

三月十八日、台中師範の卒業式が終わると、一旦マレツパ社の母の住んでいる官舎に帰った。私の就職先はなかなか決まらなかった。

ある日、台中州理蕃課長に呼び出された。

「あなたは父親の代から理蕃に関係があるから、警官になってももらいます。そしてどこかの蕃童教育所に勤めるよう考えています。花岡一郎と同じく乙種巡查です」

といわれた。私は、自分の一生をすべて理蕃課が決めることに不満だった。

「私は教員になるために師範学校を選んだわけですから、それ以外の職につくことは考えていません。もし警察官になれというのなら、日本にいる父のところに行き、大学進学の道を選びます」
「君は恩をあだで返す気なのか。これまで面倒を見たのも警官にするためなんだぞ。一郎、二郎も結局は裏切った……」

理蕃課長は、妙なことに花岡一郎、二郎のことを持ち出した。それで、二人と事件との関わりをまだ疑っていることを知った。理蕃課と対立したことで悩み、私は台中師範の大岩校長に相談した。

「君はいずれ蕃地の教育に携わる人間だ。蕃地で教える前に平地の小学校で実地に教育をしない。それから行ったほうがいいと思う」

大岩校長の指示で台中市内の明治小学校に赴任した。そのことが理蕃課で問題になり、蕃地に勤めろということで、半年後、霧社公学校に転任させられた。

霧社は私にとって故郷のようなものであるが、まだ私の中に暗い影を強く落としていた。赴任してすぐ運動会があったが、会場の回りには大勢の巡査が銃を持って、ものものしい警戒をしていた。

道路の開削

山間部の蕃社にはもともと道らしい道はなかった。総督府の理蕃政策にともなう隘勇線（警備線）の拡大と、治安のための武器輸送が必要となり、道路の建設が求められた。山岳地帯であるため、山あり谷ありでその工事は難行を極めた。

道路建設の義務使役が蕃社の大きな負担となり、口々不満が蓄積していった。道路を建設すると、次に鉄線橋が必要となる。総督府は鉄線橋の材料運搬、駐在所建設の使役を命じた。もちろんある時は義務出役もあったが、大体は賃金が支払われることになっていた。しかし、蕃社の農

耕時期に長期間の使役が続くと、自分の家の農作業が全くできなくなってしまふ。特に高地農業は天候に左右され、僅かひと月でも時期を外すとその年の収穫がなくなる。それは山地生活者にとっては死活問題となる。

そんな各人の個人的な事情には一切お構いなく、霧社分室は数日間にわたって使役を命じた。病氣などで使役に出られない場合は、金を支払ってでも代役を送った。夫が出られない時は妻や子どもが使役に出た。霧社事件ではこの使役の問題が、最も大きな原因になった。花岡一郎、二郎は官舎に残した遺書に、問題が使役にあつたことをはっきり指摘している。農業は山地の人々の生活に不可欠な食の問題であるだけに、それを無視したので反感を買ったのである。

また、使役の賃金の支払いが遅れがちで、しかも警察側のピンはねが激しく、それが彼らの怒りを一層大きくした。

霧社事件後、川中島（現・清流）に強制移住させられたロードフ社出身の曾少聰から次のような話を聞いた。

曾少聰は父親が病気がちだったため、十歳の頃から代わりに使役に出ていた。ところが使役に出てもそのつど賃金を支払ってくれるわけではなく、塩を渡されたというのだ。

明治以後、蕃地行政はすべて警察にゆだねられ、警察課が権力を一手に握っていた。蕃地の理蕃道路、鉄線橋、橋梁、駐在所、蕃童教育所など各種の建設には、その工事の監督を霧社分室主任や各駐在所主任（警部補）に請負わせていた。ある区間の道路建設費が二千元であれば、それを丸ごと主任に手渡した。主任はその金で蕃社の人を雇い、安い賃金で働かせ、塩などの現品で

支払うこともあった。浮いた金は当然のようにピンはねした。もちろん全く支払われないこともあった。

私の父はマレッツパ駐在所の主任だったが、工事で余った金で蕃地の壮丁にご馳走し、自分は一銭も取らなかったといっていたが、大抵の主任はピンはねしていた。主任を何年か務めて、大金を貯めて内地に帰った人を私は何人か知っている。

私が霧社公学校の教員として赴任した直後、ある蕃社の駐在所管内で工事があった。

霧社事件後は埔里の能高郡役所の庶務係が工賃を直接手渡すように改められていた。工賃の支払いが終わると、庶務係は埔里に帰った。

ところがその日の夕方、警部補の命令で、賃金を受け取った者が駐在所に呼ばれた。

「今日支払った賃金は少し多く払い過ぎたから、明日の朝までに駐在所に持ってこい」

警部補は自分で作った帳面を見ながら、支払った金額を訂正した。

あまりにもあくどいやり方に怒った壮丁が、帰りに私の母のいる官舎に寄って訴えた。

驚いた霧社分室が調査したところ、警部補が賃金を取り戻したことが判明して彼は免職になった。

この一件だけを例にとっても、霧社事件以前にはいかに不明朗な会計が行われていたかが想像できる。

戦後

霧社公学校教師時代に私は井上文枝と結婚して、戦時中埔里の溪南国民学校に勤務した。

「あなた、日本は戦争に敗けたのよ」

官舎に帰ると、文枝が顔色を変えて私に知らせた。その言葉を聞くと、目の前が真っ暗になった。すぐには信じられず、翌日の新聞でそれが事実だったと知った。それでも敗けたような気がしなかったが、やはり急に不安になった。

しばらくは学校に留用が決まり、新政府から校長に任命された黄さんが接収にきたが、以前からよく知っていた方だったのでよくしてくれた。

そのうち弟の宏が女房の豊子と家族連れで溪南の官舎にやってきた。全身殴られたとわかる姿で人相まで変わって、声を聞いてはじめて宏だとわかった。台湾の東部海岸を警備していた下山部隊長だったため、敗戦の混乱に巻き込まれ、部下の台湾人兵士から報復されたのだと説明した。

さらに進駐してきた政府軍から逮捕されるのではないかと、宏は毎日びくびくして過ごしていた。子どもたちにも外出するなど厳しくいいつけ、おびえて精神的におかしくなった。以前勤務していた台中農業講習所に戻ることにになり、軍服を脱がせて私の作業服を着せた。

一九四六年（昭二一）三月になると、技術を待った日本人は新政府に徴用されたが、ほとんどの役人、給料生活者は職を失った。商売か農業をしながら、引き揚げる日まで食べることを心配しなければならなかった。

私は母に帰国のことを相談した。

「お前、なんということを。私が日本へ行くとも思っているのかね。今行くのだったら父さん

が帰国する時に一緒に行っているよ。私はどんなことがあっても、家族を捨てて帰った父さんの住む日本だけは嫌だよ。せめてお前だけでも台湾に残っておくれ、頼んだよ」

と母はいった。その言葉に私は胸が痛んだ。

どういう事情があろうと、勝手に日本から新しい妻を迎えて妻子を捨て、日本人の妻との間に二人の子を儲けて帰国した父に対して、口には出さなかったが激しい怒りを持ちながら耐えてきた母の心情はよくわかった。裏切った父、そして伸子おばさんが住む日本に行きたくないのは当然だった。それに、蕃地にいる兄弟や親戚と別れて、異国で暮らすことには耐えられないだろう。私は母に対して日本と一緒にいる兄弟や親戚とは強いていえなかった。失職した私は、母の生まれ故郷のマレッツパ社に行つて、農業をしながら自活することを決心した。

埔里に国民党の行政出張所が開設されたので、区長の陳鳴環に会つて、マレッツパ社への入山許可証の交付をお願いした。

マレッツパ社は、霧社の中でも一番の辺境の地で、谷間を雲が走るような所だった。百姓をしたことがない私と文枝にとつて、そこでの生活は想像を絶するものだった。近くには私の妹の静子が息子の征男と住んでいて、夫の佐塚昌男の復員を待っていた。

慣れない農作業からくる過労とマラリアで、文枝が倒れてしまった。さらに、マレッツパ社から夫の郷里マシトバオン社に帰っていた静子が、マラリアであっけなく世を去った。

まもなく国民党政府から、マレッツパ社の私たち家族に対して日本への送還命令書が届けられた。

しかし、霧社から遠いマレツパ社への私宛の通知が遅れ、台北での集合期日はとくに過ぎていた。そのまま台湾に滞在すると不法在留になるので、台中州の県政府に交渉に行った。その担当者で自分の母親は日本人だといって同情してくれた。

父がいた当時、母と私たち兄弟は父の戸籍に入籍していなかったが、私の徴兵検査を機に日本国籍を認めさせていた。

「日本国籍のまま台湾に在留するとなるとこれからは難しい問題が起こるから、帰化の手続きをするので一時在留を認めて欲しいと申告したらどうですか？」

その担当者の世話で、やっと在留だけは認められた。

当時、台湾では教育改革が行われ、中国語が国語となった。日本時代に教壇に立っていた教員に対して、徹底した再教育が始まった。中国語教育の講習が終わると、私は新たに教員の資格を取り、マレツパ国民学校の辞令をもらった。

日本の警察行政から新政府への移行で、一番混乱したのはこれまでの蕃地だった。日本語を強制されて育ったために、彼らは中国語を話せなかった。国民学校の教科書は中国語に替わり、これまでの皇国史観が国民党政府の歴史観になったが、時代が変わったといっても住民の意識は昔のままだった。

南方の戦場に行っていた特別志願兵や軍属（正規の軍人ではなく軍の「雇い」の生き残りが、続々と復員してきた。みんな戦闘帽に日本軍のカーク色の軍服を着て歩くので、一時はマレツパ社に旧日本軍が集結して、政府に反乱を起こそうとしているという噂が飛んだ。戦地帰りの青年

たちを旧日本軍と誤認して、それを指揮しているのが私だという根も葉もない話さえ飛び出した。それがどう伝えられたのか、台中に呼び出されて国民党政府の特務の取り調べを受けた。

それまでマレツパやマシトバオン社のような高地では、マラリアの感染は考えられないことだった。静子の死亡後、十人が続いて亡くなった。ついに母もマラリアに倒れ寝込んでしまった。

台中の宏が、ドイツ製の葉アテプリンを手に入れて持ってきたので一時は回復した。母は長い間寝ていたので頭髮にシラミが生じ、櫛ですいてやったが卵が残ってすぐ繁殖した。自分の力で立ち上がれないほど衰弱していたが、日本にいる父のことを想い、しきりに会いたいといった。

「私は死んだらウットハン（西方の空）に行くよ。お前も死んだら必ずきなさい。そこで待っているからね」と母はいった。

母が亡くなる前日のこと、朝暗いうちに玄関の扉を叩く音がした。私が出て見ると、蕃社のユーグッピータイ（母の弟の頭目ヤブタウレの妻）、私の叔母のユーガイタウレ、リットクタウレの三人がきていた。

「ピッコはもうすぐ死ぬよ。私たちはその靈魂に知らされてやってきたんだ」

母の妹のリットクタウレがいった。早速部屋に行って見ると、母はまだ息はしていたがもう話す力は失せていた。そして私の腕の中で静かに息を引き取った。母の死を見取った私は、これ一家の長男としての勤めを終わったと思った。

蕃地政策の犠牲になった悲劇の母だったが、生まれ故郷のマレツパ社で一生を終えたことはせめてもの幸せだったかも知れない。母の死を契機として、残った家族のためにも、私自身も台湾

に骨を埋める決意をした。